

名人團平と「壺坂」

作のよし悪しはとにかくとして、明治になつてからの新作淨るりで「壺坂」ほど人口に膾炙し、人氣に投じたる淨るりは稀れである。これは主として、節付の二代豊澤團平の偉らかつたことを物語るものであるが、團平一代のうちの數多の節付の中でも、「壺坂」は傑出した一つである。

これほど流行つた「壺坂」の出來た由來や初演などが、案外世間に誤り傳へてゐる。年代の新しい淨るりであるから、今のうちに誤りを正すとともに、その節付の團平の死について書いておかう。

この「壺坂」といふ淨るりは、臺灣で客死した三代大隅太夫が、語り始めたものであるとしてゐる人が多いやうだ、現に「日本百科大辭典」にもさうなつてゐるが、實はさうでない。又この「壺坂」の作者を團平の妻女のちか女と思つてゐる人もあるが、これも俗説である。

「壺坂」の作者

「壺坂」の作者は分らないといふのが正當だ。團平の女房のちか女は「壺坂」の改作者であつて、作

者ではない。ちか女は京で舞の師匠をしてゐた。備前の去る小大名の奥へ上つてゐた人だといふ。恐らく端女であつたらうと思はれるが、多少文字のあつた女で、和歌も詠んだ、手跡も見事な女であつた。何んでもいゝ「日本一の男」——乞食でもいゝ「日本一」の乞食に嫁したいといふのが、彼女の希望であつた。そして當時「日本一」の三味線弾、名人の稱あつた團平に嫁したのであるが、團平は藝にかけては「日本一」だが、家庭的には平凡な男であつた。少し吃つて物をいふといふ質、見ようによつては、女房ちか女の尻に敷かれてゐた男である。ちか女はこんな家庭に往々見る「賢こがり」の女で、文字もあるところから、ちよい／＼淨るりの改作をした。それも全體に互つた改作といふよりも、身内の弟子などが語り場がないと、役を受取つてから、改作増補をして、團平の節付で語り場をよくするといふ事情の許に改作したことなどが往々にしてあつた。

例へば「櫻鏝」うなぎざたに鱸谷の段の口の如き、今日語つてゐるのは、おちかの改作である。これは今の土佐太夫が伊達太夫時代に、明治二十四年九月、彦六座で役を受取つてみると、つまらない五分間ばかりですむ端場であつた。當時豊澤新左衛門が伊達を弾いてゐたのだが、團平には可愛がられた弟子であり、おちかが又目をかけてゐた。で、新左衛門の松三郎のために、すら／＼と書加へて「お師匠はんに頼んで手をつけておもらひ」といつた調子であつたといふことである。

又、西國三十三所藤井寺の縁起の「彌陀三信記」にも、おちかの筆が加へられてゐる。この藤井寺の端場の盗人が僧を縛る、盜賊に妹があつて、その女の弟が縛られた僧であるといふ枕がちか女の筆であるといふ風に、弟子の役をよくするがためにちか女は屢々淨るりに加筆してゐるのであるが、この加筆が文章としてはとにかく、節付がよく出来るやうになつてゐた。ちか女の筆になつたくだりは、團平の節付を待つて光彩をますのであつた。

斯くの如くにしてちか女の加筆が、益々冴えて來てたうとう「壺坂」を大成せしめたのだ。「壺坂」の本來の原本は西國三十三所の縁起で「觀音靈場記」とある。例へば「中山寺」の如きは「中山寺」多田の段より兵庫屋敷の段まであり、次に鐘の緒の段があるといふ八百屋の婆々に似た「炭屋」の婆々の髪が中山寺の鐘の緒に吊るさるゝといふ筋の縁起物で、この鐘の緒の段を書卸しには假名太夫が語り、吉田辰五郎の人形遣ひになつてゐる。この内の一段に「壺坂」があつて、元來三十三所の縁起本を元にして改作されたのが、現在のちか女作と傳へらるゝ「壺坂」であるが、ちか女の創作ではなかつた。これを團平が節付して今日聽く「壺坂」となつたのであるが、團平の節付も實は二段の改訂があつて、遂に大成したのである。

「壺坂」の初演は島太夫

右に述べたちか女が加筆した縁起ものからの新淨るり「壺坂」が出来たのを團平が節付をして、床にかけたのは明治十六年卯の十月、大江橋の席が始めで、語つた太夫は島太夫、三味線は初代新左衛門の一の門弟新三郎、ツレが新之助であつた。この新之助といふのは、日本橋の汁熊の息子で、後に東京で新平となつた三味線弾きである。そしてこの段を吉田辰五郎出遣ひの早變りであつた。

この島太夫は「猫島」と呼ばれてゐた。猫のやうな顔をしてゐるといふからの綽名であつたが、世話淨るりの名人、例へばこの新作の「壺坂」とか、「沓掛」とか、「阿漕」、「帶屋」といつたものが得意であつたといふから、ほどその淨るりの質が推測される。して大きな體の太夫であつたが、その頃の藝人に多く見る貧乏型の男だが、島太夫と來ては底抜けの貧乏、太夫商賣が五行本がないといふ體たらくだ。よれ／＼になつて汚れた五行本をめくることが出来ないまでに使つてゐるから、本の上をつまんでめくる五行本の左の下の端はボロ／＼になつてゐたといふ位であつた。

この島太夫が、初演の時には、さして、さしもの「壺坂」も人氣がなかつた。然しいゝ淨るりだといふので、これも世話の名人であつた住太夫——即ち雛太夫から越太夫になり、住太夫になつた人が、島

太夫の「壺坂」を受けて語つたのが二度目であつた。

この後住太夫の「壺坂」を語りたといつたのが大隅太夫で、節付をした團平に尋ねたことがあるが團平はもう自分の付けた節は忘れてゐた。そして「壺坂」なら越太夫が覚えてゐようから、越太夫から受けるといつたので、大隅は越太夫から「壺坂」を覚えて來た。當時大隅の三味線は團平が弾いてゐたので、團平は昔自分が拵へた「壺坂」を大隅から聞きながら、更らに改作するところがあつて大隅の語り物となつた。

この二段の階梯を経た「壺坂」の節付は、大隅太夫がこれを床に上すに至つて、俄然として流行し、人氣に投じたのであるが、實質も島太太越太夫の語つたのは極めてジミな淋しい手がついてゐたのを、二度目の團平の節付で、現今見るが如き派手なものとなつた。恐らくこれが人氣に投じたのであらう。島太夫の澤市の「貧乏なれた」出來榮えは立派なものだつたさうだ。

これについて面白い團平の語つた一挿話が殘されてゐる。

今の新左衛門(二代)が團平在世の頃に名古屋へ行つた。名古屋の實業家奥田正香氏は素人天狗で、「壺坂」がおはこだ。新左衛門の三味線で語つて見るとどうしても合はない。新左衛門が、正香氏に誰に習つたかと訊くと、中京の女の師匠花澤柳枝に教はつた。——柳枝は住太夫に教はつた。——といふので

正香氏はほんとの「壺坂」はこれだといふ。新左衛門の「壺坂」は團平直傳である。それで合はないのだから、新左衛門は不思議に思つて、大阪へ歸つてから團平にこれを訊きたさうだ。すると團平は曰く、——松公(當時新左衛門は松三郎といつてゐた)俺が雪達磨を拵へておいたと思へ、これを隣の人が雪の上を轉がして持つて歸つた。又その隣の人が雪の上を轉がして持つて歸つた。一町廻つてゐるうちに雪達磨は全く異つた形をして俺の家の軒先へ返つて來たのだ。が、俺が拵へた最初のも、二度目に歸つて來たのも、どつちも俺が「雪達磨」だが、どつちがほんとかといふと、歸つて來たのがほんとうだ。外のは知らぬが「壺坂」ばかりは大隅の語るのが、ほんとうの「壺坂」だよ。——と。かくてハデな大隅太夫の「壺坂」が榮えた。そして淨るりから歌舞伎の舞臺へ、今日の如く舞臺でも床でもくり返さるゝ人氣のある淨るりの一つとなつた。

ところで、この「壺坂」書卸しの大江橋の席の番付を見ると、「糸調里曉」と書いてある。この「里曉」といふのは、團平の作者號であつた。淨るりの節付の名の番付に書いてあることは、番付としては珍しい事で、これを見ても、團平も可なり得意の節付であつたことが窺はれる。

又、ちか女の加筆した條を、書卸しの節付草稿本の手蹟によつて調べると、「夢が浮世か」の枕だけだつたのが、後に至つて、再び眼が開いてからの萬歳の條が、ちか女が加筆したのであることを、私は確

めた。

三味線を弾きながら死んだ團平

明治三十一年四月一日が、博勞町の稻荷の稻荷座の初日であつた。この稻荷座は、明治二十九年に創立されて櫓下の太夫は、竹本彌太夫、三味線は豊澤團平で、この時の出し物は番付にもあるやうに、前が「戀女房染分手綱」中狂言が、彌太夫の「帶屋」次が團平の三味線で大隅太夫の「花上野志渡寺」はたのうのしどうじであつたが、團平はこの「志渡寺」では名譽の逸事を残してゐる。

それはかうだ。——この前に千本の鮮屋を出したときに權太の引込みで、力の籠つた絃の音色で、イキがピタリと合つたので、權太を遣つてゐた人形の吉田玉造が、ウン、ウン、ウンと力を籠めたので、玉造の腹帯が切れたことがある。切らす團平も團平なれば、腹帯を切つた玉造も玉造だとあつて、當時藝壇の佳話として傳はつてゐた。この名譽ある「鮮屋」以上に、三味線の力の籠るべき「志渡寺」を今度弾くのであるから、團平もさすがに緊張してゐた。

この時の切が、今は死んだが素人に返つて下駄屋の主人となつてゐた春子太夫で、「付物」として「萃源氏」あはせ伏見の里を出してゐた。春子の三味線は今の新左衛門であつた。新左衛門は初め松吉後松三郎と

なつて團平に師事してゐたが、この興行で二代目新左衛門を襲名し、その出し物がこの「伏見の里」であつた。新左衛門にとつては記念の興行であつたので、「伏見の里」の「彈出し」を團平が工夫をして、「雪」と「入相」の手をこめて、新左衛門のための記念の「彈出し」を付け、樂屋で爪弾きで新左衛門に語り聞かせ、自ら筆を執つた「朱」を新左衛門に與へて床に上つたのであるが、この「朱」が團平の絶筆となり、新左衛門へ教へたこの「彈出し」の工夫が、その最後のものではと思ひもかけなかつたのである。

丁度初日の夜九時頃、團平は徐々として例のオクリを弾き、大隅が「跡見送りて菅の谷は、暫し」と語る。團平の弟子は勿論、稻荷の樂屋から表に至るまで、心耳を澄して聞いてゐたが、この日の團平の音色はいよゝ／＼冴えてゐた。大隅が凡そ九分通りも語つたかと思ふ頃に團平は撥を落して、前のめりにガツクリと、肩衣を着たまゝで二つに折れてしまつた。

樂屋にゐた人々はハツとした。新左衛門は切に出るので肩衣をつけてゐたが、そのまゝ飛んで出て足を引つぱる、友松(今の鶴澤道八)が頭をかいて、とにかく彌太夫の樂屋に入れた。舞臺に穴を明けてはといふので、豊澤龍助が床に飛上つて弾きつゞけたのであるが、龍助は羽織を着たまゝ、今はめつたにしてゐるものがないが、當時の淨り三味線弾きの風俗であつた萌黄の前掛をしたまゝ、撥は風呂敷に

つゝんで、結び目を左の腕へ引つけて袖に忍ばせてある。このまゝで龍助は、「志渡寺」を弾いたのである。團平は彌大夫の部屋で唸つてゐた。

鹽町三休橋筋の角で團平は落命した

團平の病は腦溢血であつた。三休橋の深澤病院から院長が來た。とにかく應急手當として、バケツで芥子をとかし、足から胸と塗つたが、芥子がなくなつたといふので、洋食屋へ使を走らし、カレー粉をといて胸へ塗つた。そして深澤病院へ戸板に乗せて送ることとなり、深澤院長が付添ひ新左衛門は稻荷座の提燈を提げ、戸板に添うて師匠の脈をとりながらしづ／＼と、博勢町から三休橋へと出るのであつたが、この間に二回まで團平の脈は止まつた。すると醫師は注射をする。三度目に脈のとまつたのが、三休橋筋鹽町の角の交番の後ろだつたが、三度目の注射は何の反應もなかつた。

絶命した團平の遺骸は、病院まで擔ぎ込むがものでないから、道を轉じて清水町井池西へ入る北側の二軒目の團平の自宅へ送り届けた。團平時に七十二歳。葬儀は、四月五日安倍野で行はれたが、藝界まれに見る盛儀であつた。

この團平最後の番付から、今現存してゐる太夫三味線、人形遣ひを拾ひ出すと、番付面の源子太夫が

今の源太夫。伊達の土佐太夫。活動のチョボになつてゐる一太夫。隅榮太夫。三味線では富子の今の富太郎。吉子の吉彌。新左衛門。團友。兵市の吉兵衛。友松の道八。人形では門造。襄助の文五郎。玉六の玉七。榮三などである。

團平の知られざる逸事の二三

團平の逸事は随分ある。知られないもの二三を拾つてみると。

團平は見たとこ女のやうな人だが、名人肌の家事に無頓着な、女房ちか女まかせの人だつた。大隅太夫が紋下になつた時に、團平の宅へ來て稽古をする。今までは團平は座蒲團をしき、大隅には與へてゐなかつたが、紋下になるといふ時の稽古には、自分は座蒲團から迂り、大隅へは蒲團をすゝめ、遠慮は無用だ、苟くも櫓下となつたらば、わしが稽古を付ける付けぬに拘はらず、それだけの貫祿を持たねばならぬといつて、強ひて蒲團の上に坐らせた。そしていつも二人の稽古には、座にあるちかを退けた。これは稽古の模様を他人が見てゐて紋下の權威にかゝはるやうな事があつては、お仕打に申譯けがないといふのがその主張である。この時ばかりは團平は、「いまゝで稽古のときだつて私がゐましたよ」といつちか女を嚴として、その座から退けたといふことである。

團平は風呂へ入るに糠袋へ白粉を入れて使つたといふ人だが、左の手は決して湯へは浸さなかつた。固より爪を軟くせまいための用意である。それほど神経質であつたから、病ひには弱かつた。明治二十三年に九州へ前の源太夫や、伊達太夫などで巡行のをりに、團平が長崎で病氣に罹つたが、その時の宿屋が料理屋を兼ねてゐて、鶏がゐた。夜になると「コケツコーキユ」と啼く、このキユを團平が酷く氣にして、俺はもう死ぬ死ぬといひつゞけて、とう／＼中途から歸つて、當時源吉であつた後に三代をついだ團平が、代りの三味線を弾くことになつたこともある。

こんな小供らしい一面のあつた人であるから、その悴を米國へやつて藥劑師とした。悴の平三郎が歸朝した時に、土産は香水の製造だつたといふが、平三郎氏の製造した香水を貰つた弟子達は、團平の宅を出ると、香水を捨てゝしまつたなどの笑ひ話が傳へられる。

團平の弟子に團勇といふおどけた弟子があつて、氣むづかしい團平でも、この團勇にかゝると、つい釣込まれて笑つてしまふ。或る日の事、團勇は團平に向つて、

「師匠は名人だ／＼と世間ではいひますが、随分古いへタだ、古べただんな。」

團平はムツとして「へタかえ。」

「へタだんがな、師匠は五十年から三味線を持つてゐながら、私達と一緒に、撥で弾かんけりや、テ

ンともツンともいへしまへん。私は二三年來の三味線だが、同じ音色がしますよ、五十五年も三味線を持つてゐるやほるなら一つウンときばると、テンとかツンとか鳴らしたらどうだす。」

などいつで、團平師匠を凹ましたといった男だつたが、團平が病氣になる、病氣まけをしてウンくいつてゐると團勇が來て、水を口にくゝんで團平の頭から吹きかける。「これで師匠すつかり治ります」といふと團平は「ほんに頭がすつとしたよ」といつたやうな小供らしいところがあつた。この團勇、勇太夫といふ太夫になつて、名古屋に稼いでゐたがコレラで死んだ。

團平と攝津大掾とが相撲をとつたといふ逸事が一つある。

會津の小鐵が、京の北の芝居で、淨りりの興行をした折の事である。一座は盲目の住太夫に、三味線が勝七、むら太夫に三味線の新左衛門、元の染太夫に三味線が松葉屋の廣助、攝津が越路時代で三味線が團平だつたが、宿は越路の弟子の操みさほが營んでゐた川端四條上つた明梅あけじめであつた。ある夜芝居が濟んでから好酒家の團平が、酔つたのであるが、表の間の廣い座敷に越路が宿り、裏の狭い方に團平がゐた。この二つの座敷の間が板敷といふ上方の二階座敷によくある間取。この板敷へ越路を呼び出して、團平が相撲をとらうといふ。越路は迷惑がる。わざと倒れると、もう一番もう一番と、徹夜して越路が弱らされたといふほど團平の酒はうるさかつたが、とう／＼酒が祟つて舞臺で頓死したのであつた。